

名古屋周辺は常緑広葉樹林のシイやカシが生い茂る環境だといわれています。丘陵地での二次林では、アカマツ、クロマツ、コナラなどの群落が見られます。しかし、開発や街路樹の植樹など人の手加わることによって大きく変化しています。名古屋周辺で見られる植物を、いくつか紹介します。

1 ハンノキ (カバノキ科)



高さ 20m に達する落葉高木で、川辺や湿地など湿り気のある所に群生します。幹は直立分枝*し、樹形にはいくつかのタイプがあるようです。樹皮は紫褐色から暗灰褐色で、縦に浅く裂けて剥がれます。

葉は細長い楕円形で先端が尖り、互生し葉柄が 2~3cm 前後と比較的長く、付け根付近の葉幅がやや狭くなります。葉縁には浅く細かい鋸歯があり葉の裏面には葉脈がよく浮き出ています。葉は緑色のまま落葉します。雌雄同株ですが、雄花と雌花が明確に分かれた雌雄異花で、雄花の花序は枝先から垂れ下がり、雌花は雄花の基部に 1~5 個できます。果実は松ぼっくり状です。

*直立分枝：茎がまっすぐ上に伸びて、途中で枝分かれ（分枝）もする植物の生育形態

2 シュンラン (ラン科)



山林や低山地の乾燥した土地に多い常緑の多年草で、4 月によい香りの花が咲きます。土壤中にひげ状の根を広げ、その根は太くて肉質です。葉は茎の基部につき、まるで根から出ているように見えます（根出葉）。葉は細長く薄いですが固く、根元から立ち上がり、2 列の扇状に出て上半部分は湾曲して垂れます。葉は細かい鋸歯があつてざらつきます。葉の陰にのばした茎の先

端に、横を向いて花が咲きます。萼片^{がくへん}と側花弁^{そくかべん}（花弁が 3 枚の花で左右の 2 枚の花弁）は倒披針形^{とうひしんけい}（幅の最も広い部分が、先の方にある）、黄緑か緑でつやがあり、やや肉質です。萼片は広がって三角形の頂点を作り、側花弁は葯柱^{しんべん}（雄しべと雌しべが融合した棒状の器官）を囲うように互いに寄り合います。唇弁^{しんべん}の色は白色で、濃赤紫色の斑紋が入ります。果実は紡錘形

で、熟すると茎が伸びて葉の上に出て、上に向いて直立します。種子は極めて小さく、埃^{ほこり}のように見えます。

3 ヤマザクラ（バラ科）



落葉広葉樹の高木で、幹は直立分枝し、樹皮は暗褐色から暗紫褐色で、横長の皮目^{ひもく}（通気のための組織）が目立っています（横の縞模様が目立つ）。老木は黒褐色を帯びて、粗くひび割れが生じます。桜皮^{おうひ}（樹皮）には大腸菌、黄色ブドウ球菌に対して抗菌効果があることや、ポリフェノールの一種であるフラボノイド（「いもち病菌」に対して抗菌性を示す）が含まれていることなどが知られています。江戸時代の民間療法としても桜皮はさまざまに応用されていました。樹形は逆三角形で樹高 15m 前後であり、里山や山地にごく普通に生えています。葉は互生し、長楕円形から卵状長楕円形です。葉の表面は無毛で、葉裏は白っぽく、鋸歯はソメイヨシノより細かいです。種の数も多く、便宜的に山地に植生する野生のサクラを総称してヤマザクラ（山桜）といふことがあります。薄桃色の花が赤味を帯びた新芽の芽吹きと同時に開花するので、花が先に咲くソメイヨシノと異なります。花弁は 5 枚の一重咲きで、色は白色から淡紅色（樹種によって濃淡がある）です。材は緻密で、かつては浮世絵の版木などに使われました。樹皮は光沢があることから、カバザクラの別名があるように茶筒などの容器の装飾とする樺細工に用いられています。

4 ハルリンドウ（リンドウ科）



日当たりの良いやや湿った山野や湿地に生える草本で、群生することが多い植物です。根本からロゼット状の根出葉（＝根生葉）を地表に広げ、大きくて重なり合っています。葉は5mm-1cmの披針形（細長く、両端が尖り、葉の基部側に一番広い部分がある形）。花は3～5月に咲きます。花茎を根出葉の中から花を咲かせるために茎を伸ばし、10cmほどの高さになると、先端に紫色の花をつけます。花（花冠）は長さ2～3cmの漏斗状で、朝、日光を受けると開花し、夕方に閉じます。

5 アセビ（ツツジ科）



低木常緑樹で、白い釣鐘状の花を穂状につけます。口にすると酔っぱらったように体中が熱くなってフラフラになるようで「馬酔木」と書きます。葉や茎に毒があります。葉にグラヤノトキシンIなどの有毒成分が含まれることから、ウマが葉を食べれば毒に当たって苦しみ、酔うが如くにふらつくようになる木というところからついたと言われています。グラヤノトキシンはⅠ～Ⅲの三種あり、細胞膜上のNaイオンチャネルに結合し

て興奮と脱分極（細胞内がマイナスに帯電している状態がプラスの方向に変化すること）を継続させます。そして、カルシウムイオンを流入させるために骨格筋や心筋の収縮を強め、期外収縮（心臓の電気信号の異常によって起こる不整脈）などを起こし、迷走神経（副交感神経：^{えんげ}嚥下、発声、消化などの機能を調整）を刺激した後に麻痺させる作用も持っています。このため、多くの草食動物はアセビを食べるのを避けます。普通、樹高1～3mの常緑広葉樹の低木から小高木で、山地の尾根やアカマツ林によく生え、やや乾燥した環境を好みます。根元近くから枝分かかれし、樹皮はややねじれながら縦に細く裂けます。葉の形は先に近い部分で幅が最大になる倒披針形で、枝先に束になって互生します。葉縁には鋸歯があり、葉身は深緑色で厚い革質で、表面に艶があります。早春になると枝先に10cmほどの房になった全体が円錐形をした花（円錐花序）を垂らし、白い壺状の花を多数咲かせます。

6 ヘビノボラズ（メギ科）



温暖な地域の湿地近くの痩せ地でみられる落葉低木で、東海丘陵要素の樹木とされています。生い茂った葉の下に数本の鋭いトゲがあり、ヘビも登れないの意味で名付けられました。葉縁に刺毛状の細かいのこぎり歯（棘毛）があり、枝は赤褐色でその節には葉が変形した単一または3分岐した棘があります。よく枝分かれし、樹形はほぼ球形です。樹皮は暗灰色～灰褐色でコルク層が発達しており、縦に深く裂けるのが特徴です。材はアルカロイドを含み薬用にされ、葉を煎じると、眼病のときの洗眼に役立ち、茎や根は胃腸に効くといわれます。他にも寄せ木細工の材料や生垣として利用されます。葉は倒卵形-倒披針形で、先端はやや鋭く基部はやや細くなって葉柄状になり、主に短枝の先に集まって互生します。花は5月頃に咲き、短枝の先から総状花序（付け根から先へ花柄を持つ花が咲いてゆく）を伸ばし、鮮やかな黄色の花を付けた花序が下へ垂れ下がります。

7 マキノスマレ（スマレ科）



尾根や乾燥した日当たりのよい所にみられ、葉をほぼ垂直に伸ばします。葉の先端は長くとがり、基部は深いハート形で、葉縁にみられるやや間隔のある鋸歯は、ギザギザの先端が鈍く、丸み



スマレの部位の説明図で
マキノスマレではありません

を帯びています。葉の質はやや厚く、表面は濃緑色で無毛で光沢があり、裏面は紫色を帯びます。花も葉裏も紅紫色をしています。花は4～5月頃咲きます。唇弁には紫色のすじが入り、側弁の基部に毛はありません。唇弁の後端は袋状になっており（距）、細長く、長さ6～8mmになります。雄蕊は5個あり、花柱はカマキリの頭形になっています。マキノスマレは牧野富太郎を記念したものです。

8 タチツボスミレ（スミレ科）



日当たりや半日陰（午前中または午後だけ日が当たるような場所）の林縁に見られ、花は淡紫色の一角です。丸い葉とななめに立ち上がる茎が特徴です。葉の根元にある、葉のような形をした付属器官を托葉^{たくよう}と呼びますが、クシの歯のような切れ込みがあります。スミレは距とよばれる花蜜を貯めているところが、大工道具の墨入れに似ていることから名がついたといわれます。日本のスミレ属は種類が多いですが、タチツボスミレは代表的な1つです。多年草で地下茎はやや短く、わずかに横に這っています。根出葉は細い葉柄があって、葉は心形（ハート形です。葉にはあまり艶がありません。花茎と呼ばれる花だけをつける茎は葉の間から出て立ち上がり、先端がうつむいて花を付けます。花の形はスミレより丸っこく、花は薄紫色の花弁に、濃紫色の筋が入っています。花期が終わると、葉の間から茎が伸び始めます。

9 コバノミツバツツジ（ツツジ科）



春に目立つツツジで、尾根の乾燥地や日当たりのよい所に多く見られ、愛知県以西の乾燥したアカマツ・コナラ林などではかなり普通に見られます。高さ1～3m程の落葉低木です。葉が3枚展開するミツバツツジ類の一種で、葉裏は網目模様がよく目立ちます。3～4月頃に紅紫色～淡紫色の花が多数咲きます。花粉が細い糸でつながった構造をしており、昆虫の体に付着しやすくなっています。また、1本のめしべの回りを取り囲むように10本のおしべがあります。

10 ヤマナラシ（ヤナギ科）



ポプラの仲間の落葉低木で、明るい山地に生え寒冷地に多い樹木で、樹形は卵形です。風が吹くと葉柄が縦に扁平なため左右に横揺れします。

樹皮は灰白色で菱形の模様（皮目）が目立ちますが、老木では黒みを増して縦に裂け、黒っぽい菱形の模様（そろばん玉のようなもの）が浮かび上がってきます。葉は互生し、ひし形～円形で、裏面は灰白色です。葉柄は長く、左右から押しつぶされたように縦に扁平なため左右に横揺れし、さらに葉と葉の間隔が狭いため、少しの風でも、葉と葉が触れ合って音になることから「山鳴らし」の名がつけられました。葉の鋸歯はやや波形で、葉の付け根はゴマ粒状の蜜線が一对あります。雌雄異株で、葉に先立って3～4月に雌雄それぞれの花は垂れ下がります。雌花は長さ6～10cmほどで黄緑色、雄花は長さ5cmほどで薄茶色になります。雌花の後には同じような穂状の実となり、綿毛を持った種子（柳絮^{りゅうじょ}）ができ、初夏に拡散されます。材は加工しやすく、建築、器具、彫刻に利用され、特に木箱を作るのに重用されたことからハコヤナギという別名があります。また、かつてはマッチの軸やパルプにもこの木が使われました。

11 ミツバアケビ（アケビ科）



落葉つる性の木本で、3枚の小葉があることからミツバアケビとよばれます。山野に生え、荒地や乾燥地でも育ちます。果実は液果（多肉質）で食用になります。つるの繁殖力は強く、茎が他の樹木にからんで這い上がり、地面を這う枝も出します。つるの巻方向は、上から見て時計

回り（右巻き）で、茎は太いもので直径 2cm になります。つるは細工に用いられます。樹皮は灰褐色から紅褐色をしており、丸い皮目がまばらにあり、不規則に亀裂が入り成木になると剥がれます。葉は互生し、掌状で小葉が 3 枚になる 3 出複葉で波形の鋸歯があります。

葉の表面は濃緑色、裏面は淡緑色で、両面とも無毛です。小葉の先端はわずかに凹み、基部が円形にやや膨らむのが普通です。雌雄同株、雌雄異花の植物で、雄花・雌花ともに濃暗紫色です。色が濃くて大きめなのが雌花で、雄花は小さいのが特徴です。花に花弁はありません。

12 オオバヤシャブ（カバノキ科）



高さ 10m に達する落葉の小高木で、幹はやや傾き、砂防樹としてよく植えられています。根瘤を持つため、やせ地に強く、また根が深く、生長が早い樹木です。樹皮は灰褐色で若い枝には円形の皮目が点々につき、太くなると大きな割れ目がつきます（縦に筋がはいる）。葉は互生し、葉身は卵形、基部は円形ですが左右不同で、葉脈がはっきりし、縁には鋭い鋸歯が二重になっています。葉は付け根近くで葉幅が最大となり、三角形に近い形です。雌雄同株、雌雄異花で、枝先から、葉芽、雌花序、雄花序の順につくのが特徴です。三河地域では非常に多いといわれます。

13 スイカズラ（スイカズラ科）



初夏に一对の白色、やがて黄色となる花つけます。スイカズラの名は「吸い葛」の意味で、細長い花筒の奥に蜜があり、古くは子どもが好んで花の管の細いほうを口に含んで甘い蜜を吸うことが行なわれたことにちなみ、蜜をすう唇の形が、花の形に似ていることに由来します。砂糖の無い頃の日本では、砂糖の代わりとして用いられていました。各地の平地から山野の野原、土手、山林、林縁や道ばたによく見られ、夏季に乾燥しない場所で、

当たりの良い場所を好みます。茎は分岐しながら長く右巻きに伸びて他の植物に絡みつき、他のつる性植物と比べて穏やかに繁茂してゆき、長さは10mほどにもなります。2年目以降の茎は太くなるとつるの髄は中空になり、樹皮は縦に細く裂けて剥がれて灰褐色を帯びます。葉はつるに对生し、葉の形は成長過程や季節によって変化があり、春の若葉は縁が波打って羽状の切れ込みがあり、夏は全縁で先端が少し尖り、また、冬期は厚めで裏面に少し巻いたような形になります。つぼみは薄紅色、咲き始めの花は白色をしています、受粉するなどして徐々に黄色くなります。そのため、一つの枝に白い花と黄色い花が同居することがよくあります。花や茎葉は、薬用や食用、また染料になります。

14 ササユリ（ユリ科）



本州中部から九州に分布する多年草で、山地の草原や明るい森林に生育します。茎の高さは1mを超えるようになり先のとがった葉を互生します。葉はやや厚く、笹に似ている（披針形：葉の幅が最も広い位置が葉柄の側に近い）ことからこの名がつけられました。地下には白い鱗茎（ユリ根）があります。5月～7月頃に淡いピンク色の花を咲かせます。花粉の色は赤褐色または黄色です。

雄しべは6本で葯^{やく}は鮮やかな赤褐色で、強い香りがあります。森林の利用が減ったり、利用方法が変化したりしたことがササユリの減少をもたらしていると考えられています。

15 ネジキ（ツツジ科）



高さ6m程度に生長する落葉の小高木で、里山や山地の乾燥した尾根やアカマツ林に多く生育します。初夏にスズランに似た釣鐘型の白花を総状につけ、樹皮や材がねじれているのが特徴です。

このため、細工物には使えないといわれます。葉は互生し卵状の楕円形をしており、先はとがっています。葉縁はよく波打ち、葉の裏の葉脈の付け根に細かい白い毛が生えています。

16 イボタノキ（モクセイ科）



谷沿いの明るい森林や林縁に生育する（陽樹）樹高 2～4mの落葉樹の低木ですが、冬に葉が少し残ります。樹皮は淡灰白色で、若い木は縦長の皮目があり、生長すると縦の筋が入ります。枝は灰白色で、放射状に伸びて、あまり分枝しないまっすぐなものが多数並びます。その小枝は横向きに伸び、葉がほぼ等距離に多数並びます。先端が円く長楕円形で、全縁の葉が対生します。表面につやがなく、質はうすく柔らかいです。

葉の中央の葉脈（主脈）が谷折り線のように目立ち、主脈は葉の裏側にも突出しています。裏面は淡緑色です。初夏に甘い香りの白い小さな花を密集して咲かせます。花は筒状の合弁花で、先端は4枚に分かれています。雄しべは2本です。果実は核果（内側の硬い部分が大きな核となり、その核を多肉質の果肉が包んでいる果実）で熟すと紫黒色になります。樹皮上に寄生するイボタロウムシの分泌する「いぼた蠟」は、^{ろうそく}蠟燭の原料や家具のつや出し、日本刀の手入れに用いられます。また、材は楊枝や器具の柄などに用いるほか^{まき}薪や炭などの燃料用（薪炭材）に使います。

17 リョウブ（リョウブ科）



落葉の亜高木で、山地や里山の乾燥した尾根によく生えます。幹は曲がり、株立ち樹形*になることも多いです。若木の樹皮は灰褐色ですが、古くなると表面が縦長な形に薄く剥げ落ちて、茶褐色と灰褐色のまだら模様で、滑らかな木肌になります。葉は枝先に集まってらせん状に互生しま

す。葉先に近い部分で幅が最大になり、先端は尖っています。葉縁の鋸歯は細かく数が多く、葉裏の葉脈上には白い毛が多くみられます。葉柄や主脈が赤みを帯びることが多いです。7月頃に甘い香りの長い総状の白い小花をたくさんつけます。花弁は白く5裂しています。若芽は山菜とされ、秋には紅葉します。

*株立ち樹形：一本の茎の根元から複数（3本以上）の茎が分かれて立ち上がっている様子

18 テリハノイバラ（バラ科）



落葉または常緑のつる性の低木です。湿地の周辺や林縁の日当たりを好む植物で地面を這うように生えます。枝は無毛で、まばらにかぎのよう^{とげ}に先端が下向きにやや曲がった形の刺があり、わき枝（側枝）は直立して先端には花がつきます。つるは緑色や紅紫色で細かい筋が見えますが、太いものは淡褐色で表皮が裂けます。葉は葉軸の左右に7～9の小葉が並び（先端に1枚の小葉がある奇数羽状複葉）ます。

小葉は厚く、円形または広卵形で、縁にはあらい歯牙があります。表面は深緑色で光沢があり、裏面は黄緑色です。和名は、葉がかたく光沢があることに由来します。6～7月頃、直径4cmほどの白い花を小枝の先に数個ずつつけます。果実は熟すと赤くなり光沢があります。

19 サワシロギク（キク科）



夏に緑葉をつけ、冬に葉を落として休眠する夏緑性多年草で、日当たりの良い酸性の湿地に生育します。地下茎が湿地の中を細長く横に這って広がります。細い茎は50～60cmほどの高さまで直立し、分枝が少なく、まばらに毛があるか無毛です。葉は線のように細長く、根元がやや広いが、両端が尖っており（線状披針形）、やや硬く、ざらつき、縁にまばらに低い鋸歯があります。

8～10月ころに白い舌状花（花弁の先端が広がり 舌のような形の花）をまばらにつけます。和名は山間湿地に生育する白い菊であることに由来します。

20 ヘクソカズラ（アカネ科）



つる性の多年草で、やぶや道端など至る所に生える雑草です。夏に中心部が赤紅色の白い小花を咲かせる。葉や茎などをつぶすと、悪臭を放つことから屁屎葛（ヘクソカズラ）の名がある。葉をもむと嫌な臭いがすることから名づけられています。一方、かわいらしい花であることから、サオトメバナ（早乙女花）、サオトメカズラ（早乙女蔓）ともよばれます。茎はつるになり、太くなると木質化し、左巻き

に他の物に絡みつきます。葉は茎に対生し、形は披針形（細長く両端が尖っていて、葉の基部側に一番広い部分がある）から広卵形で、やや細長いハート形をしており、葉縁は全縁です。葉柄の付け根には葉状のもの（托葉）がついています。夏から秋ころに花弁・花冠が白く、内面中心が紅色の花を多数咲かせます。花形は漏斗形で、花冠は浅く5裂します。独特の悪臭成分はメチルメルカプタンで、食害を受ける害虫などから身を守るためのもの（アレロパシー）と考えられています。果実をつぶしたものは薬や化粧品として利用されることがあるようです。

21 ウスノキ（ツツジ科）



落葉広葉樹の低木で、山地に生え、日当たりの良い岩場などにも生えます。樹皮は淡灰褐色で、ほぼ滑らかですが、太くなると縦に裂けてきます。若い枝は緑色で、稜（枝に沿って角が連なる）があって、2列に並んだ短毛が生えます。枝はジグザグ状になっています。葉は互生し、長楕円形から楕円形で、先端は鋭くとがり、基部はゆるやかにとがっています。葉の表面はふつう無毛で、裏面は主脈の両側に短い軟毛が密生することがあります。葉の縁に鉤状の細鋸歯があります。春に緑色に朱色を帯びた釣鐘型の花が咲き、秋には紅葉し、真っ赤な実をつけます。和名の由来は、果実の先端が白のようにへこむことによります。

22 サワフタギ (ハイノキ科)



落葉広葉樹の低木で、山地に生え、沢や湿地などの湿り気のある場所に生育します。

名の由来は、沢をふさぐように茂ることによりますが、尾根に多い樹木です。枝を横に広げる樹形で、枝は灰褐色でよく分枝します。若木の樹皮の表面は滑らかですが、樹皮が縦に細く浅裂し、老木の樹皮は、裂け目が深く割れてきます。小さな鋸歯をもつ倒卵形から楕円形の葉を互生します。先端は急に短く尖って、基部は楔状に細くなります。葉の表面にはまばらに押しつけられた毛があってザラザラし、裏面の葉脈に毛が生え、葉縁には先が内曲した細鋸歯があります。葉の葉脈はくぼんで目立ち表面に毛がありざらつきます。5～6 月ころに白い花を多数咲かせ、9 月頃から藍色のゆがんだ卵形の実をつけます。果実は核果です。材は器具材や細工物に用いられ、燃やした後の灰汁は紫染めの媒染剤（染料が繊維に定着し、発色や色持ちを良くする物質）に用いました。

23 スイラン (キク科)



湿地性の暖地系の植物で、中部地方以西の本州から九州に分布する多年草です。茎がランとよく似ているので水蘭となづけられました。低地の湿原やその周辺、貧栄養な溜池の湖岸などに生育します。地下茎があり、細長い根出葉を出します。葉縁には不明瞭な鋸歯（柔らかいがやや厚い）がまばらにあります。裏面は粉白色であり、両面とも無毛で切ると白い乳液がでます。9 月～10 月ころ、茎の先端に頭花をつけ黄色いキクのような花を咲かせます。

24 フユイチゴ（バラ科）



里山の林内にも生える常緑のつる性の小低木で、地面を這い高さはせいぜい 30cm くらいです。キイチゴの仲間としては珍しく、果実が冬に赤く熟すところからこの名があります。全体に毛がありますがトゲ（枝に棘がある）は少なく茎の節から根を出して殖えていきます。葉は互生して、葉身は円形で、浅く 3～5 つに裂けます。葉表は緑色かやや褐色がかった緑で、毛が少なくツヤがあり、縁には細かい鋸歯があります。裏面には細かい毛が密生し

ます。9 月～10 月ころ、穂状に花弁が 5 弁の白い花を数個つけます。晩秋から赤い果実がなり、11 月～1 月のころに熟します。食用となります。

25 コナラ（ブナ科）



高さ 15m に達する落葉広葉樹の高木で、幹はやや曲がり、樹形は不ぞろいです。里山から山地まで普通に生えます。ミズナラの別名であるオオナラと比較して、葉とドングリが小さめでコナラと呼ばれます。樹皮は灰黒色から暗灰褐色、黒褐色で、縦に深い裂け目が入ります。

葉は 10cm 前後と小さく、やや細長い倒卵形（葉幅が葉先に近い部分で最大）で、葉裏は灰白色になっています。葉縁には鋭い鋸歯があります。4 月～5 月ころに若葉が広がると同時に目立たない黄緑色～黄褐色の花が咲きます。雄花は尾状に垂れ下がり、雌花は上部の葉の付け根につきます。花は地味なもので、風媒花です。秋には紅葉し、黄色から黄褐色や橙色に色づきます。10～11 月ころには楕円形のドングリができます。他のブナ科樹木と同じく、菌類と樹木の根が共生して菌根を形成しています。薪炭林の代表種で人里近い雑木林や山地によく見られ、また、樹液にはカブトムシが集まることが知られています。

26 フユノハナワラビ (シダ科)



常緑，多年性のシダです。冬に新葉を出し，花のような孢子葉を開くのでこの名で呼ばれます。

茎は直立し，葉は栄養葉と孢子葉が1つにまとまっており，共通の柄の先にこの2つが付いています。丸っこい羽状複葉の栄養葉（孢子のうをつけない葉で，おもに光合成を行う）と立ち上がる孢子葉（孢子のうを付けた葉）を持ち，山野草の1つとして栽培されることもあります。

栄養葉は全体としては広5角形から広3角形までで，葉質は草質から厚めの草質まであり，色は緑色で先端は鋭く尖ります。葉縁は不規則で先端が鈍く尖る鋸歯となっています。孢子葉の部分は複穂状にわかれ，孢子の表面はやや細かな網の目状となっています。和名は冬の花蕨です。

27 タカノツメ (ウコギ科)

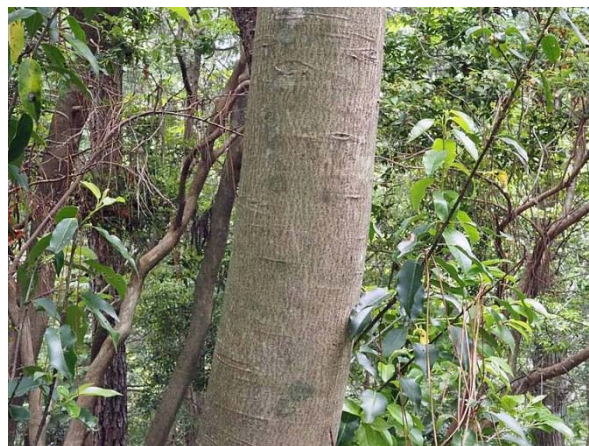


落葉小高木あるいは落葉高木で，雌雄異株です。低地や丘陵地帯から山地に自生し，痩せ地に多い樹木です。幹，小枝の樹皮はともに灰色～灰褐色で滑らかです。枝の髄は白くて詰まっており，材は柔らかいです。葉は小葉が3枚集まった三出複葉です，単葉，二小葉のものもあります。葉は長枝に互生し，短枝または枝の先端に束のようにまとまって生えているか集中しています。葉の表面は緑色で無毛で，裏面は灰緑色です。葉縁は毛状の小さく目立たない鋸歯になっており，先端が急に細くなり尖ります。5～6月には中心部の白い淡緑色(黄緑色)の小さな花が集まって総状になります。花卉，雄しべともに5個ずつで，花柱は2裂します。秋には美しく黄葉します。果実は球形の液果で黒く熟します。冬芽が鷹の爪を思わせるため，この名が付けられ



ました。

28 ソヨゴ (モチノキ科)



山地や山間部によく見られる常緑広葉樹の小高木（小低木）で冬でも葉が青々と茂っています。株立ちで多く枝分かれをする樹形になります。樹皮は灰褐色でほぼ滑らかです。葉は互生し、卵状楕円形で、やや革質、光沢があつてのっぺりした外見を持ちます。表面は明るい緑で滑らかで、葉脈（主脈）が明るい色で目立ちます。裏面はやや白く主脈が突出します。葉縁は全縁で滑らかですが、波打つのが特徴です。葉には、1～2cm と長めの葉柄があります。雌雄異株で、5～7月頃、雄花・雌花共に径4mmほどの小さな白い花が咲きます。果実は直径7～8mmほどの球形の核果で、ぶら下がってつき、10～11月ころには熟して赤くなります。木いっぱい葉が茂り、風にそよぐと金属音を立てることから、ソヨゴと名付けられたといわれています。根は浅く、大きく成長すると台風などによって倒れやすい樹木です。

29 ウルシ (ウルシ科)



落葉高木で、樹高10mになり、樹形はあまり分枝しません。肥沃で水はけのよい土壌を好むとされます。葉は中央の軸（葉軸）の両側に3枚から7枚（1対から3対）の小葉が並び、全縁

です。雌雄異株で雄花しか付けない雄株と雌花しか付けない雌株があります。雄花は緑色で雄しべが5本、雌花は子房1つに柱頭が3分されたものが付いています。秋には葉が真っ赤に色付きます。樹皮を傷つけて生漆を採り、果実は乾かした後に絞って木蠟を採ることができます。

30 ナツハゼ (ツツジ科)



山地・丘陵地に生える落葉広葉樹の低木で、夏にハゼノキのような紅葉が見られることから名づけられました。特に花崗岩の土地を好むといわれます。幹は株立ちになることもあり、枝は横に広がり、不規則な樹形となります。樹皮は灰褐色で、若木は平滑ですが、次第に薄い縦長の裂片となってはがれ落ちます。葉の表面に立つ毛が散らばりざらつき、葉の裏の主脈上にも立つ毛があります。葉身は卵状楕円形で、先端は鋭くとがり、全縁です。5月～6月ころ、赤褐色～淡赤褐色の釣鐘型の花をつけます。秋には鮮やかな赤色に紅葉します。果実は径7-8mmになる球形の液果で、黒色に熟し食べられます。

31 ハゼノキ (ウルシ科)



低地で、暖地の海に近い地方に多く分布し、山野に生え、植栽もされています。寒さには弱く、明るい場所を好む性質があります。雌雄異株の落葉広葉樹の小高木から高木で、樹高は5～10mほ

どになります。樹皮は灰褐色から暗赤色で、縦に裂けてやや網目状の模様になる。葉は9～15枚の小葉からなり、小葉は少し厚くて細長く、先端が尖っています。小葉は全縁です。表面は濃い緑色で光沢がありますが、裏面は白っぽく、葉の表裏ともに毛がありません。小葉がついている軸（葉軸）は少し赤味をおびることがあります。5～6月ころ、枝先に黄緑色の小さな花を咲かせます。雄花、雌花ともに花弁は5枚で、雄花には5本の雄しべがあり、雌しべは3つに分かれています。葉や枝をちぎると白い乳液が出て、ふれるとかぶれます。秋には真っ赤な色に紅葉します。扁平な球形の果実が熟すと黄白色から淡褐色になり、果実を蒸して圧搾して採取される高融点の脂肪（木蠟は、^{わろうそく}和蠟燭、坐薬や軟膏の基剤、ポマード、石鹸、クレヨン、化粧品などの原料として利用されます。木材は、心材が鮮やかな黄色で、工芸品、細工物、和弓、^{はじぞめ}櫨染（黄色の染料）などに使われます。

32 アベマキ（ブナ科）



クヌギに似た落葉広葉樹の高木です。クヌギとは様々な程度の雑種を形成して見分けが付きにくいようです。樹皮は灰黒色で深く裂けます。コルク層が発達しており指で押すとへこみます。葉は大きく、葉裏には白っぽい毛が密生しており、枯れ葉になっても残ります。葉縁の鋸歯は棘状になって緑色が抜けています。雌雄同株、雌雄異花で、4～5月ごろ雄花は淡黄色で新枝の葉の付け根から房になり下がり、雌花は枝の上の方に1個ずつ付きます。9～10月ごろにはクヌギよりは若干大きい堅果（ドングリ）ができます。他のブナ科樹木と同じく、菌類と樹木の根が共生して菌根を形成しています。

33 ヒサカキ (ツバキ科)



常緑低木の小高木で、根元近くから枝分かかれし 2～5mの樹高になります。山地や丘陵地に生え、目立たないですが非常に数が多い樹木です。樹皮は灰褐色から暗灰褐色で滑らかです。枝は横向きに出て、葉が左右交互にでて、平面を作る傾向があります。葉は狭倒卵形や楕円形で先が尖ります。葉縁に丸い鋸歯があり、葉が大きくて鋸歯がないサカキと区別できます。葉は厚みがある革質で、表面はつやが強いです。雌雄異株で4月ころ、枝の下側に短くぶら下がるように小さい白い花を多数つけ、異臭がします。果実は直径4mmの球形で、秋から冬にかけて黒紫色に熟します。「ヒサカキ」は、サカキに比べて小さいことから「姫サカキ」が転訛してヒサカキになったといわれます。

34 モチノキ (モチノキ科)



常緑広葉樹の高木～小高木で、幹は直立して整った卵形の樹形になります。寒気の強い内陸では育ちにくいので、暖かい地方の海辺に自生します。樹皮は灰褐色～灰色で、小さな皮目が散在しますが、皮目以外は滑らかです。縦に浅いしわもあります。和名は樹皮から鳥ちょうもち鱗が採れることに由来します。葉は互生し、のっぺりして葉脈はほとんど見えません。葉は楕円形・倒卵状楕円形で、葉先がやや突き出ます。革質で濃緑色をしており水分を多く含んでおり、クチクラ層に覆わ

れていることから塩害に強い樹木です。雌雄異株で、株単位で性転換する特性があります。4月ごろには、雄花・雌花ともに黄緑色の小花が、葉の付け根に雄花は数個ずつ、雌花は1 - 2個ずつつきます。花弁はうすい黄色でごく短い枝に束になって咲きます。

35 シャシャンボ（ツツジ科）



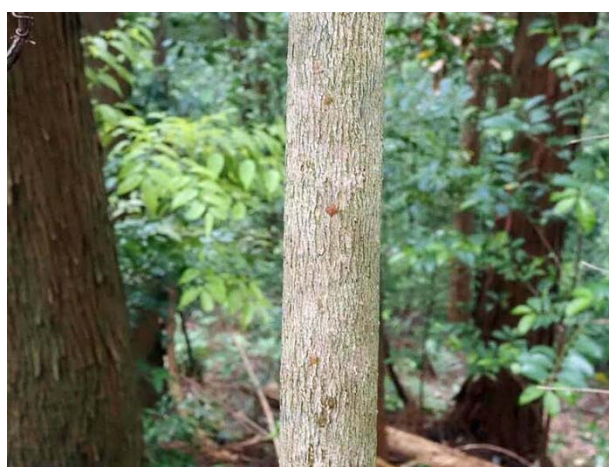
常緑広葉樹の低木（小高木）で、低山の尾根に点々と生えます。暖地の海沿いや、やや乾燥したところにも見られます。枝は当初は細かい毛がありますが、やがて無毛となり、白くなります。葉は楕円形でやや厚い革質で表にはつやがあり、葉脈はややくぼむので、表面に網目状の溝があるように見えます。葉裏の主脈上には小さな突起があり、指でなぞると引っかかります。葉縁には細かい鋸歯があります。初夏に壺形の白い小さな花が鈴なりになって咲きます。果実は直径5mmほどの球形の液果で、黒紫色に熟すと白い粉が吹いて食べることができます。甘酸っぱくアントシアニンを多く含んでいます。

36 ヌルデ（ウルシ科）



山野の林縁などに生える落葉広葉樹の低木で、枝を斜めに広げて逆三角形の樹形になります。雌雄異株です。若木の樹皮は無毛か毛が残り、緑褐色で割れ目形の楕円の皮目が多く、次第に緑色が抜けて、成木は灰褐色になります。樹液は皮膚につくとかぶれやすいです。葉は7～13枚（3～6対）の奇数の小葉が互生しており、葉縁の鋸歯は目立ち、毛が多くザラザラしています。大きな特徴として葉軸に翼がつくのがあげられます。葉は秋に紅葉し、ハゼノキやヤマウルシほど赤色は濃くなりませんが、赤・橙・黄・茶色などが混在することもあります。晩夏から初秋には黄白色から白色の小さな花を多数咲かせます。花弁は反り返っています。秋には扁平な球形をした果実を、かたまって多数つけます。

37 ムラサキシキブ（クマツヅラ科）



落葉広葉樹の低木で、株立ち樹形になることが多く樹高2～4mになり里山や山地に普通に見られます。小枝はやや水平に伸び、樹皮は淡褐色で、若木の樹皮は滑らかです。太い幹の樹皮は縦に裂けてきます。葉は対生し、菱形に近い長楕円形、鋭尖頭（先端が少し突き出すこと）で、細かい鋸歯があります。葉の鋸歯は付け根近くまであります。葉色は黄緑で洋紙質で、薄くて表面につやはありません。初めは表側に細かい毛があることもあります。葉の裏側には毛はなく黄色の腺点があります。初夏から夏ごろ小さな淡紫色の花が咲きます。秋（10月ごろ）には、果実が熟し、紫色になります。

38 ガマズミ (スイカズラ科)



山地や丘陵地の明るい林や草原に生える落葉広葉樹の低木です。樹皮は灰褐色で、若い枝は星状毛や腺点があって、灰緑色で楕円形の皮目が多いです。古枝は灰黒色で皮目がみられます。葉は対生し、丸みが強く（倒卵形）、鋸歯は細かくあまり尖らず波状で、葉の両面にあらい毛が多く、葉柄や若い枝にも毛が多いです。初夏に白い小花を多数咲かせ、秋には酸味がある赤い果実をつけます。秋以降の果実は食べられ、ワイン色の美しい果実酒になります。材は丈夫なことから、鎌や鋤など農具の柄に用いられ、染料や油も採られます。枝は柔らかく折れにくいので、昔から枝をよって縄をつくり、何かを束ねる時に使いました。

39 ウメモドキ (モチノキ科)



落葉広葉樹の低木で、湿った林縁を好みます。樹皮は灰褐色をしており、滑らかで皮目が多くよく目立ちます。葉は互生し、楕円形で先端が尖り、葉縁は細かい鋸歯形状です。葉の裏に毛があります。5～7月ころ、淡紫色の花を葉の付け根に咲かせます。雌雄異株で雌株は秋には径約5mmの真っ赤な果実をつけます。果実は9月頃から赤く熟し12月頃に落葉しても枝に残るため落葉後の赤い実が目立ち小鳥が好んで食べます。葉の形がウメの葉に似ていることや花も梅に似ているところからこの名があります。

40 カンアオイ（ウマノスズクサ科）



小型の多年草で常緑です。茎は短く、地面を匍匐します。葉は互生で、形は卵形～卵状楕円形で、先端は尖り、基部は深いハート形です。濃緑色で白い斑紋があり、まばらに毛が生えています。花は10月～11月ころ、地面に接して咲きます。花のように見えるのは花弁ではなく3枚の萼片です。萼片は基部で癒着し筒状の部分（萼筒^{がくとう}）をつくります。ここは先がくびれず、暗紫色で、内側に格子状の隆起線があります。先端の部分（萼裂片）は三角形で萼筒よりも短く、濁った黄色です。雄しべは12本、雌しべは6本です。ギフチョウの食草として知られます。

植物の写真（複数あるものは左側）は特記したもの以外は滝川正子氏から頂いたもので、解説は筆者が付けました（20 ヘクソカズラは筆者撮影）。樹皮の写真を中心とした右側の写真は下記のWebサイトからお借りしました。

ハンノキの樹皮：<https://okayamanaturecons.life.coocan.jp/information/plant/tree/hannoki3.htm>

ヤマザクラの樹皮：<https://www.jugemusha.com/jumoku-zz-yamazakura.htm>

ヘビノボラズの樹皮：<https://silviculturetech.com/species/hebinoborazu/>

スマレの花の構造：<https://mikawanoyasou.org/data/sumire-kouzou.htm>

ヤマナラシの樹皮：

https://www.uekipedia.jp/%E8%90%BD%E8%91%89%E5%BA%83%E8%91%89%E6%A8%B9%E2%91%A2/%E3%83%A4%E3%83%9E%E3%83%8A%E3%83%A9%E3%82%B7/#google_vignette

ミツバアケビの樹皮：<https://www.jugemusha.com/jumoku-zz-mitubaakebi.htm>

オオバヤシャブシの樹皮：<https://www.jugemusha.com/jumoku-zz-oobayashabusi.htm>

ネジキの樹皮：

<https://www1.ous.ac.jp/garden/hada/plantsdic/angiospermae/dicotyledoneae/sympetalae/ericaceae/nejiki/nejiki.htm>

イボタノキの樹皮：

<https://www1.ous.ac.jp/garden/hada/plantsdic/angiospermae/dicotyledoneae/sympetalae/oleaceae/i>

botanoki/ibotanoki.htm

リョウブの樹皮：uekipedia.jp/落葉広葉樹-ラ行/リョウブ/

ウスノキの樹皮：<http://www.chiba-museum.jp/jyumoku2014/dat/u/usunoki/usunoki.html>

サワフタギの樹皮：<https://www.jugemusha.com/jumoku-zz-sawafutagi.htm>

コナラの樹皮：Wikipedia

タカノツメの樹皮：Wikipedia

タカノツメの冬芽

<https://www.uekipedia.jp/%E8%90%BD%E8%91%89%E5%BA%83%E8%91%89%E6%A8%B9%E2%91%A1/%E3%82%BF%E3%82%AB%E3%83%8E%E3%83%84%E3%83%A1/>

ソヨゴの樹皮：<https://silviculturetech.com/species/soyogo/>

ウルシの樹皮：

<https://www.uekipedia.jp/%E8%90%BD%E8%91%89%E5%BA%83%E8%91%89%E6%A8%B9%E3%82%A2%E8%A1%8C/%E3%82%A6%E3%83%AB%E3%82%B7/>

ナツハゼの樹皮：<https://mikawanoyasou.org/data/natuhaze.htm>

ハゼノキの樹皮：<https://www.rokkosan-shizen.jp/sub220.html>

アベマキの樹皮：Wikipedia

ヒサカキの樹皮：<https://silviculturetech.com/species/hisakaki/>

モチノキの樹皮：<https://ameblo.jp/seiken1905/entry-12839641176.html>

シャシャンボの樹皮：

<https://www1.ous.ac.jp/garden/hada/plantsdic/angiospermae/dicotyledoneae/sympetalae/ericaceae/syasyanbo/syasyanbo3.htm>

ヌルデの樹皮：

<https://www1.ous.ac.jp/garden/hada/plantsdic/angiospermae/dicotyledoneae/choripetalae/anacardiaceae/nurude/nurude8.htm>

ムラサキシキブの樹皮：<https://silviculturetech.com/species/murasakishikibu/>

ガマズミの樹皮 <https://blog.goo.ne.jp/arazaran/e/c188d299cbf44e6b3115c788e7111fc0>

ウメモドキの樹皮：<https://hananusubito.blog.fc2.com/blog-entry-6847.html?sp>

主な参考文献

林 将之, 2010, 葉で見分ける樹木. 小学館, 303 p.

牧野富太郎, 1973, 牧野新日本植物図鑑. 1060 p. 北隆館

(文責 村松憲一)